

熊野の神

匠瑛探訪

172

大寺（豊和地区）熊野神社の関係者から資料提供と併せて、本殿内部を拝見する機会が与えられました。

県道74号線に隣接し、うっそうとした林の中にある熊野神社は、857年または961年に建立したと伝わります。

現在の本殿は、柱に墨で書かれた文字から1675（延宝3）年3月に建築が始められ、同年5月16日に完成したことが知られます。現存する市内の神社では、建築年が比較的古い部類に入ります。

本殿中央に宮殿くわてんがあり、この中に御神体が祭られているのでしよう。今回は、その隣にある御正体みしょうたいと呼ばれる御神体に注目しました。

江戸時代、熊野神社は熊野権現くまのぐんげんと呼ばれ、現在は廃寺となった能円寺のうえんの住職が管理しています。

御正体は、和歌山県・熊野三山神社とゆかりがあり、鏡の裏面に3体の仏像が浮彫りされています。

1910（明治43）年、神社が千葉県に提出した「神社財産登録申請」の熊野大神宝物の中の「御

鏡青銅製」がこれに当たるでしよう。作者は「天下一津田薩摩守家宣」と

記名されているとのことですが、今回はそれについて調べませんでした。

本殿の中におそらく明治初年に御神体を納めたであろう宮殿と、それ以前の御神体である御正体があることは、1868（明治元）年3月から始められた「神仏分離」政策による影響が熊野神社でもあったことを伝えていきます。

神仏分離では神社と寺院を分け、仏像を御神体とすることが禁止されました。

明治初年に大寺村では星宮神社と稻荷神社2社、そして熊野神社の合わせて4社が登録されましたが、1930（昭和5）年、熊野神社だけに合祀ごうしされました。

建築後、三百数十年経た本殿修復の機運があると聞きました。

（市文化財審議会委員・

依知川雅一）

閩秘書課広報広聴班

☎73・0080



熊野神社に祭られる御正体